

# 『南総里見八犬伝』の史伝的展開(上)

石川 秀 巳

## 第一節 安房里見家の歴史としての『八犬伝』

—

『南総里見八犬伝』の構想は、榎島昭武編『書言字考』(享保二年(一七一七)刊)数量門「里見八犬士」の項を起点とした。〈犬〉字を苗字に冠する八人の勇士を登場させるにあたって、曲亭馬琴は人獣交婚譚を導入して〈犬〉に根拠を与えた。〈犬の子〉の物語が発想されたのである。そうした幻想小説構想の基本的骨格を〈高辛氏神話〉から得たことは、馬琴自身が肇輯「八犬士伝序」に、

如<sup>キハ</sup>伏<sup>スルカ</sup>姫<sup>ニ</sup>嫁<sup>スルカ</sup>。八<sup>ニ</sup>房<sup>ニ</sup>。倣<sup>ヘリ</sup>高<sup>ニ</sup>辛<sup>ニ</sup>氏<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>女<sup>ヲ</sup>妻<sup>ス</sup>。槃<sup>ニ</sup>瓠<sup>ニ</sup>。

と言明し、あるいは第九回の挿画「義実怒<sup>よしざねいかつ</sup>て八房<sup>やつふさ</sup>を追<sup>おは</sup>んとす」の下部に「援引<sup>いんえん</sup>事実」として『五代史』を引き明示するところであった(一)。敵将を討つた犬に賞として娶せられた娘が犬との間に子をなし、その子が蛮夷の祖となったという古代中国の神話を、伏姫・八房・八犬士の関係に変換して、物語の機軸とする。さらに、伏姫割腹・八玉飛散

の場面に『水滸伝』第一回(楔子)の伏魔之殿からの魔星出現を重ねることで、『水滸伝』の構成を模した枠組が用意される。つまり、〈百八魔星出現・百八好漢の梁山泊結集〉の枠に対応して〈八玉飛散・八犬士の安房参集〉の枠が敷設され、その中に超自然的要素を多く含む挿話群を充填し、幻妖の物語世界を構築しえているわけである。

だが、そのような伝奇的展開が史伝的展開に覆われてもいたことを見逃すべきではないだろう。八士の姓名を列挙するのみの「里見八犬士」という原拠はかならずしも安房里見家に結びつくわけではないし、ましてや義実治世の人物として記載されていたのでもなかった。物語冒頭に提示される次のような時代的・地理的背景は、馬琴の意図的な選定によるものだったのである。

京都<sup>きやうと</sup>の将軍<sup>せうぐん</sup>。鎌倉<sup>かまくら</sup>の副将<sup>かふせう</sup>。武威<sup>ぶい</sup>衰<sup>おとろ</sup>へて偏執<sup>へんしつ</sup>し。世<sup>よ</sup>は戦国<sup>せんごく</sup>となりし比<sup>ころ</sup>。難<sup>なん</sup>を東海<sup>とうかい</sup>の浜<sup>はま</sup>に避<sup>さげ</sup>て。土地<sup>とち</sup>を闢<sup>ひら</sup>き。基業<sup>もとみ</sup>を興<sup>おこ</sup>し。子孫<sup>しそん</sup>十世<sup>じっせい</sup>に及<sup>およ</sup>ぶまで。房総<sup>あはづさ</sup>の国主<sup>こくしゅ</sup>たる。里見<sup>さとみ</sup>治部<sup>ちぶ</sup>大夫<sup>たいふ</sup>義実<sup>よしざね</sup>朝臣<sup>あそん</sup>の。事蹟<sup>じせき</sup>をつらく考<sup>かむ</sup>るに。清和<sup>せいわ</sup>の皇別<sup>みすま</sup>。源氏<sup>げんじ</sup>の嫡流<sup>ちやくりゅう</sup>。鎮守<sup>ちんじゆ</sup>府将軍<sup>ふせうぐん</sup>八幡<sup>はちまん</sup>太郎<sup>たろう</sup>。義家<sup>よしか</sup>朝臣<sup>あそん</sup>。十一世<sup>じゅういつせい</sup>。里見<sup>さとみ</sup>治部<sup>ちぶ</sup>少輔<sup>せうぶ</sup>源<sup>げん</sup>季<sup>せき</sup>基<sup>もと</sup>ぬしの嫡男<sup>ちやくなん</sup>也。

(第一回)

こうして安房里見氏の初世義実の事跡を語るところから開始された物語は、八犬士の子孫や物語中に登場した関八州諸将あるいは里見氏十世の行く末までを略述することで語り納められるのだが、その中で、  
当時落魄たる浮浪の身をもて。鶏が鳴く関の東にて。基を開き。  
地を啓きて。竟に大諸侯に做り登しは。里見氏と北条氏のみ。北条は里見に倍して。多く国を獲たれども。早雲氏綱氏康氏政氏直五世にして後絶たり。里見は房総二国なれども。子孫十世に伝へしは。義実義成二世の俊徳。仁義善政の余馨にて。民の是を思ふこと。深長なりし所以なるべし。(第百八十勝回下編大団円)

という記述は、明らかに冒頭の文と呼応している。永享の乱、さらにそれに続く結城合戦などの関東の争乱の中で『八犬伝』世界は始動し、応仁の乱前後の戦国乱世を背景として展開していく。結城の戦場を落ち安房に流遇した里見義実が、嫡子義成とともに、十世に及ぶ房総支配の基礎をその地においてうち立てたことを語るところにも、稗史として『八犬伝』を定位する馬琴の意図が認められるのである。

なるほど、発端部以降、八犬具足を終結点として展開する列伝部の範囲では、里見氏の事跡に照明が当てられることはなかった。その団円も、伝奇的構想に深く関わる因果律の完成こそが重要な指標になると考えるべきであろう。しかし、八犬具足後の展開までを包摂して理解するには、伝奇的構想を覆う史伝的枠組に注目する必要がある。『八犬伝』は二十八年におよぶ執筆期間に構想の変更・発展を重ねてきた

のであり、初期構想は対関東管領大戦を含んでいなかった(2)。したがって、大戦以降に実現する里見氏の関東制覇までを語る予定がなかったと見るべきかもしれない。だが、少なくとも、そういう照応によって物語を完結させようとしたことも確かなのである。そして、当初は意図しなかったにも関わらず、そうした完結が可能であると馬琴が考えたと思うるなら、馬琴の最終的な意図は『八犬伝』を安房里見氏の創業の物語として定着させるところにあったとすら言うことができる。『仁義善政』を布いた里見義実・義成二代の事跡をもつて『八犬伝』の伝奇的物語を外から意味づける、史伝的枠組による物語の解説が要請されるのである。

二

『八犬伝』は八犬士の活躍を語る物語であり、そこにこそ興味のはあったに違いない。しかし、永享の乱・結城合戦以降、乱世において中央の変転にくらべて比較的安定を保った安房の領主里見氏の始祖義実を歴史から取り上げて仁君として定位し、その仁政の根柢を虚構によって裏づけようと構想したものであったとこの作品を捉えるとき、八犬士の役割の別の側面が明らかになるだろう。富山入山後、妊娠の徴候にとまどう伏姫の前に草刈り童の姿を借りて現形した役行者が予言するように、「かたち作らずしてこゝに生れ。生れて後に又生れ」ることになる八犬士は、「おのゝ智勇に秀。忠信節操。里見を佐けて。

威を八州にかゞやか」(第十二回)す役割、すなわち十世に及ぶ安房里見氏の支配の基盤をうちたてる義実・義成の基業を「佐け」る役割を負っていたはずである。八犬士の物語であることは動かないにせよ、彼等の役割が義実の仁政を扶翼するものであったと考えるとき、「八犬伝」をより広く安房の秩序の物語として把握する道が開かれる。

八犬士が里見氏の扶翼者として位置づけられるとしても、しかし、物語展開の表面で八犬士は安房の秩序の確立に関して何の働きもしない。山下定包の謀叛をきっかけとして崩れていく安房の国の秩序は、八犬士が登場するはるか以前、発端部の段階で義実によって整序されてしまう。定包を討ちその圧制から領民を解放した時点で、長狭・平郡の二郡は義実の徳に包まれるのである。その徳風は、

義実の徳。孤ならずして。鄰国の武士景慕しつ。好を通じ婚縁を。募るも又多かりける。(第八回)

と、隣国にまで及ぶのである。対抗勢力としての安西景連が安房・朝夷の二郡を支配しており、それを破った後に安房の統一が果たされるのだと言ふべきかも知れない。対安西戦に勝利した義実が安房一國の主となると、その領国は次のような状況に至ったと書かれる。

かくてぞ四郡一個國。義実管領し給へば。威徳朝日の昇ることく。徳沢は時雨の潤すことく。奸民は走去り。善人は時を得たり。是よりして夜戸を鎖ず。又遺たるを拾ふものなし。久後は卒しら浜に。波風立すなりしかば。……(第九回)

「久後は卒しら浜に」と、将来における混乱が暗示されてはいるのだが

(その点については後述)、安房に理想国が実現したことだけは確かなのである。艱難を乗り越えて参候することとなる八犬士の扶翼を得て初めて安房の理想国が成立するわけではない。「八犬伝」本伝は、仁君義実によって領導される理想国が安房に確立した後に展開するのであって、「八犬伝」を理想国確立へのプロセスと読むことはできない。

『八犬伝』の前に馬琴が完成させた『椿説弓張月』(文化三十二年(一八〇七)刊)は、天孫氏二十五世尚寧王の治世、その不徳に乗じた紫巾官(大臣)利勇の策謀によって乱され、さらに国初の虬の化身である妖僧矇雲国師によって覆された琉球国の秩序を、鎮西八郎源為朝らが整序し理想国を作り上げるまでを語る。物語末尾における為朝・白縫王女・舜天丸の間の王位の譲りあい「仁」の理想国のあるべき姿が現れていたという徳田武の指摘<sup>(3)</sup>は、その限りにおいては正しい。『弓張月』構想の根幹は、その秩序を始原にたちかえって再構築していく過程を語ることに認められよう<sup>(4)</sup>。一國の秩序という観点から『弓張月』と対比するとき、『八犬伝』はそれとは逆の物語構造を持つと言つてよいのである。『弓張月』の場合には団円を意味した理想国成立から本伝が始まる『八犬伝』のこのような構造に着目するとき、因果の完成に向かう物語の展開とは異なる、安房の秩序に関わつての『八犬伝』の物語展開はどのようなものであるのかが問題となるだろう。『八犬伝』は何次かにわたる構想の変更あるいは発展の結果として存在している。そうした構想発展を単に読者の好評ゆえとのみ片づけるわけにはいかない。『八犬伝』が団円構想の変更を繰り返すのは、物語の

定着を何によって果たすのが随時変更しているということではないのか。別の言い方をすれば、その時々、團円意図によって物語の全体像の組み替えが行なわれてきたということではないのか。物語が結末によってこそ意味づけられるのならば、団円構想を変更するとき、当初の構想の中に位置を占めていた要素は同一の意義を保つことができず、新たな結末によって規定される別の意義へと変容せざるをえない。その重要な一面として安房の秩序の基盤に対する見直しが考えられるはずである。

発端部において秩序がうち立てられたとしても、それが大団円まで変わることなく安房を支えていくわけではないだろう。安房里見氏の物語として『八犬伝』を読み直そうとするとき、安房の秩序の根柢がどのように変容していくのかを問題にすることができる。『八犬伝』が勧善懲悪の物語であるとして、なぜに里見氏は善でありえたのか。その根柢を、

① 義実による安房建国

② 養田素藤の侵攻

③ 関東管領・諸将連合軍との大戦

という、里見氏の領国形成・支配に関わる問題点が表面化する三つの時期を中心にして考えてみたい。

第二節 発端部における南総秩序の確立

一

里見義実は、肇輯卷之一に、

里見治部大夫義実ぬし。このときは又太郎御曹司と呼れつ。年なほ廿に満され共。武勇智略は父祖にもまして。その才文道にも長たり。（第一回）

と、文武の才に長けた名将として登場する。第四輯卷之四、下総行徳の旅籠古那屋において、それまで冥々の力に支配されつつ出会い結びついてきた犬塚信乃・犬飼現八らと伏姫との宿縁の母子関係が、換言するならば八犬士と里見家との運命的な主従関係が、大法師によって説き明かされる。そのとき、義実の臣鬻崎照文は犬士たちに対して里見氏への仕官を求める。

わが主君里見殿は。文を右にし。武を左にす。当時無双の良将たり。この故に。仁義にあらざれば動き給はず。礼智にあらざれば起給はず。忠信にあらざれば用ひ給はず。孝悌にあらざれば賞し給はず。（第三十七回）

なんら具体性を持たぬ言ながら、これは国主としての里見義実像の基本線を示すものだろう。馬琴は義実を古今希な明君、関東諸侯の中でも徳義において屹立する存在として描くわけである。結城の戦場を落

ち安房に渡った里見義実によって「子孫十世に及ぶ」安房里見氏の礎はうち立てられるのだが、それをもたらすのが義実の理想性であったことは疑いない。

安西景連が減んだ後の安房には、新たに主となった義実の徳によって平安がもたらされる。また、その徳風が領地を越えて隣国にも及んだことが、第二輯冒頭でもくり返し語られる。

里見治部少輔義実朝臣は。山下。麻呂。安西等の大敵を滅して。

麻のごとく紊れたる。安房の四郡をうち治め。威風上総の尽処さ

へに。靡ぬ武士もなかりしかば。…… (第十一回)

こうして安房・上総二国に及ぶ義実の「徳」「威風」が強調されるのだが、それは物語においてどのように描かれているのであったか。

『八犬伝』を戦国期の歴史を背景として描きだすためには、何ほどか歴史資料・史料との間での調整を必要としただろう。義実を仁義の武将とし里見氏の支配する安房を理想国として定着させるために必要とされたはずの処置、あるいは虚構を念頭において、『八犬伝』世界の秩序がどのような発想基盤において根拠づけられるのかを考えてみたい。

二

建国の経緯を検討しつつ、まず義実の「仁政」というものをとりあげてみたい。発端部、安房統一に至る彼の言動から義実の政治論を再構成すると、おおよそ次のようにまとめられる。

第一に、その行動が民の救済・撫育といったものに向けられること。

安房に流寓する義実主従は、神余光弘を弑して平郡・長狭二郡を奪った山下定包の所業を憎み、安房郡の安西景連、朝夷郡の麻呂信時に挙兵を求める。

神余。安西。麻呂の三家は。旧交尤浅からず。手足のごとく相佐けて。当国久しく無異なりしに。神余が嬖臣山下定包。奸計をもて主を成ひ。忽地二郡を横領し。推て国主と称すれども。神余が為にこれを討ず。阿容阿容と下風に立て。共に濁を受給へば。民の誹謗も宜ならずや。某この事を申入れて。用らるゝこともあらば。犬馬の勞を竭ん。と思ひしはそらだのめにて。出陣の準備も見えず。絶てその議に及れねば。寸志を演るよしもなし。わが主従の剛臆のみ。只管批評せらるれ共。神余が為に定包を。討ざるは勇もなく。義もなき武士は憑しからず。 (第三回)

その場合の「義」は、身に漆を塗り乞食の姿となつて主の仇を狙つていた金碗八郎が義実の決起を促すその言葉の中に現われているだろう。大約二郡の民百姓。彼逆賊に虐げられ。怨骨髄に徹るといへ

ども。権に圧れ。威におそれて。且く渠に從ふのみ。人として義によること。草木の日影に向ふがごとし。君今こゝに孤独を辞せず。神余が為に逆を討。民の土炭を救んとて。一たび旗を揚げ給は。蟻の密に聚ふが如く。響の物に應ずること。皆歛で走集り。仁義の軍に命を擲。生ながら定包が穴を啖んと願ざるもの候はんや。(第四回)

義実の意図は、定包の苛政に苦しむ領民の解放・救済への期待と一致した。したがってその決起は「夏の日よりも苛酷き。えせ大領に病萎む。民草を憐て。こゝに軍を起し給は。誠に国の大幸なり。」(同前)と、百姓たちの支援によって支えられるわけである。

また、挙兵に先だつて義実は蟹を薬劑として八郎の瘡を治してやるのだが、その際八郎は次のように言つて義実を称える。

皮膚はつゞける処もなく。搔乱せし瘡は。今立地に癒たる事。文武の道に長給ふ。良將の賜なり。名医は国を医するとかや。某が身ひとつは。肩にも候はず。乱れし国をうち治め。民の苦艱を救ひ給は。寔にこよなき仁術ならん。(同前)

この部分を引いた前田愛は、こうした医療が義実の「仁」の象徴的な現われであると解釈した(5)。すなわち、義実の役割は現在定包の虐政下にある二郡の「病」を癒すことであつたのであり、「民の苦艱を救ふ」ことが「仁」と扱われている。

そして、敵城を陥落させたときに普通には行なわれるであろう略奪行為を厳しくとどめるありようにも、右に通ずるものがある。滝田城

の蔵には米穀財宝が充ち満ちていたが、義実は少しも犯すことなく、二郡の百姓たちに分け与える。定包は誅伏したけれども、なお麻呂・安西の強敵があるから、軍用として確保すべきだと諫める貞行等に対して、義実はこゝ言うのである

民はこれ国の基なり。長狭平郡の百姓等。年来悪政に苦みて。今逆を去。順に帰せしは。飢寒を脱ん為ならずや。然るをわれ又貪りて。彼窮民を賑すは。そは定包等に異ならず。倉廩に余粟ありとも。民みな叛きはなれなば。孰と、もに城を守り。孰と、もに敵を禦ん。民はこれ国の基也。民の富るはわが富む也。徳政空しからざりせば。事あるときに軍用は。求ずも集るべし。惜むことかは。(第六回)

第二に、そうした領民支配(＝民の撫育)における理想性は、たとえば戦いでの勝利あるいは領地拡大を第二義とし、民生を第一義とする愚直なまでの理想主義として現われる。

八郎の計略によつて軍勢を集めることのできた義実らが山下定包の居城に向かつて進軍を始めようとするとき、兵糧補給のため畑の麦を刈ろうと進言する八郎・貞行に対して、

わが滝田を攻る事は。民の塗炭を救ん為也。然るを今その農を奪ひ。その生麦を掠とりて。兵糧となすときは。人を食ふて身を肥す。虎狼に等しからずや。加以長狭の農民。催促に従はで。彼処に兵糧と、のはずは。是わが徳の至らぬところ。速に退陣して。徳を脩め民を撫。時を待て滝田を攻ん。(第五回)

と制する義実の言葉。軍備をあとにして、まず「おん身を賣てかくま  
でに。民を憐み給ふ」こと、つまりは民の暮しの安定を優先するところ  
に「仁心」の発現が認められるわけである。

徳を修めることで民はおのずから起伏するはずだという発想による  
とき、必然的に国の獲得あるいは版図の拡大も徳治の結果にゆだねら  
れなければならぬ。無闇な領土拡大のための戦いは義実のとるところ  
ではない。山下定包を討った勢いにのって一気に安西をも攻めるべ  
きだとの進言を拒絶して、「われ定包を滅せしは。ひとり榮利を思ふ  
にあらず。民の塗炭を救ん為也」と言う義実は、

景連梟雄たりといふ共。定包が類にあらず。その底意はとまれか  
くまれ。志をわれに寄せ。木曾介氏元が。信時を撃に及びて。  
渠いちはやく平館なる。城を抜きを媚しとて。軍を起し。地  
を争ひ。蛮触の境に迷ひて。人を殺し民を損ふ。そはわがせ  
ざる所也。景連奸計行れて。平館を取るといへども。なほ賺  
で攻来るならば。一時に雌雄を決すべし。さもなくば境を成りて。  
こ、より手出しすべからず。(第七回)

目的が民を救うことにある以上、それさえ実現できれば、必要以上に  
敵を殺戮するには及ばないのである。

また、戦法において詭道を否定することも右と関連するだろう。  
いにしへの聖王賢将。仁義の軍を起すものから。詭りをもて捷  
ことをはからず。唐山晋の文公は。詭計を用ずして。五伯の一と  
称せられ。よく周室を佐たり。孫呉が兵法。詭道を旨とす。

こは戦国の習俗也。策よしといふとも。詭をもて敵を滅し。  
その土地をたもつときは。何をもて民を教ん。(第四回)

と策略をもつて戦うことを拒み、  
一時に城を乗取らば。罪なき民を多く殺さん。(中略) 秦の降卒八  
万人を坑にせし。項羽が兇暴いへばさら也。秦の蒙恬。漢  
の霍光がごとき。智勇の将は竟に後なし。人を殺すの多き故也。  
願ふ所は定包のみ。只渠一人を誅せば足りなん。この余のうへは  
諷るに堪ず。(同前)

と、多くの兵を殺戮することの不仁を主張することになる。

そうした発想が兵に向けられるとき、賞を重んじ罰を軽くすること  
となる。

夫兵は凶器なり。徳衰て。武を講し。沢足らざれば。威をもて  
制す。こは已ことを得ざるのみ。城を攻。地を争ふも。民を救  
ん為なれば。われ楽みて人を殺さず。(中略) 俘を釈放さ  
せ。凡新にまゐれるものは。軍功の多少によりて。後日に恩賞  
あるべしと。正首に仰しかば。……(第四回)

安西領の凶作を好機として攻め滅ぼせとの金碗大輔の進言に対して、  
讐敵たりといふとも。凶に乗じて攻撃事。良将勇士はせざる  
也。況や安西景連は。今わが為に仇ならぬに。故なうして干戈  
を動す。これを無名の軍といふ。無名の軍は。人従はず。  
(第八回)

と退けた結果、逆に安西の急襲によって滅亡の危機に瀕することすら

「仁」性ゆえだと語られるわけであった。

夫君子をば欺くべし。陥るべからず。と賢者のいひけん寔に  
しかり。義実(よしざね)は蓋世(がいせい)の良将(りやうしょう)。仁心(にんしん)もつて民(たみ)を掩(おほ)ひ。義信(よししん)もつて鄰(りん)  
郡(ぐん)に交(まじ)は。景連(かげつら)奸詐(かんさ)疆(せう)なし。これを欺(あざむ)くにその方(みち)をもつてす。  
猶且(なほかつ)これを疑(うたが)は。君子(くんし)の人(ひと)と称(せう)するに足(た)らず。義実(よしざね)子産(しさん)が才(さい)  
りとも。その欺詐(たばかり)におとされたる。抑(おさ)も亦(また)宜(まじ)ならずや。(同前)

発端部における里見義実の戦いは、第一に領民を苛政からの救済することを目的とした。したがって、はじめは平郡・長狭二郡の主となり、さらに安房一国の主となったのは、衆に推されたからであり、敵の攻撃を防いだ結果にすぎないと、義実の欲望を否定するように意味づけるわけである。

しかし、安房渡航直前の義実を動かしていたのは、右とは異なる、領地獲得への期待ではなかったか。三浦の浜で蟹の子に投げつけられた土塊に「天(てん)その国(くに)を給(たま)ふの兆(きざし)」(第一回)を読み取り、雲間に目撃した白龍から「僅(わずか)に彼地(かのち)を領(りやう)せんのみ」(同前)と行く末を解説して安房に渡ってきたのではなかったか(物語の展開上も義実(よしざね)は安房(あへ)に領地を得なければならぬ)。にもかかわらず、そうした野心を義実(よしざね)から払拭(はら)することが要請(ようせい)されるのである。

三

右と表裏をなすのが、徳治者義実を中核としての安房史再編である。こうした常套的とも言える義実の「仁政」は、しかし理想主義的に過ぎ、現実性を欠く。当時上杉氏の支配地であり四人の地頭が支配するという現実的な状況のなかで安房をきり従えていった史上の義実の行為と、これは決して一致しない。義実理想化の構想に成る里見関係諸軍記とすら一致することはない。右に見たごとき理想的義実像はその素材となった歴史資料とどう関わったのか。以下、史料と作品との比較を通して秩序構築の問題点を探ってみよう。

馬琴が用いた里見関係の資料として、肇輯序には、「坊間の軍記」とのみ記されるが、第九輯下帙下編之下「回外剩筆」では以下の諸書の名を挙げる。

又里見(またりみ)の旧記(きゅうき)は。其写本(そのしやほん)坊間(ぼうかん)になし。只吾(ただわが)知る所(ところ)をもていはず。  
里見(りみ)記(き)。里見九代(りみくぐだい)記(き)。房総治乱(ぼうそうちらん)記(き)。里見軍記(りみぐんき)あるのみ。

すなわち、『八犬伝』中の里見氏の事跡は『里見記』『里見九代記』『房総治乱記』『里見軍記』などの記述をもととして作られたのである。それらの間でも安房建国の事跡は完全には一致しないのだが、『八犬伝』とくらべるとき、いくつかの大きな差異が認められる。その差異に作者馬琴の意図を読むことができるはずである。

『八犬伝』冒頭の結城の戦場を落ち延びる挿話が乙類『里見軍記』に



依拠したものであったことが考証されており<sup>(6)</sup>、里見氏関係の重要な資料と考えられる。同書は、結城落城を起点とし、義実の安房渡航を語った後、時を遡求して山下定包の件を語る。

里見又太郎義実後刑部小輔と号白浜におち来り、安西家に寄食しける所に、義実元来武勇の人なれば、安西殊の外に賞美し、一方の侍大将として合戦に武勇をあらはしける。此頃金鞠が家来に山下佐左衛門といふもの有けるが、謀反をおこし、ひそかに主人金鞠太郎光孝を殺害し、金鞠の地を押領し、かの地に住す。依之此郡山を下郡と号すは此ゆへなり。さる間、安西山下佐左衛門が無道を悪んで、おのく軍勢をもよふし、金鞠へおし寄せける。山下元来無道人ゆへ、誰あつて彼に属するものなければ、甚だ無勢にて終に叶はず、山下討たなければ、彼金鞠が領地をわけとる。然るにまた安西と丸・金鞠のもの共不和と成り、既に度々の合戦に安西討勝ける。此ときも里見又太郎義実安西が手に属して、五十騎の大将として武名をあらはしける。〔安房の守護職の事ノ

里見義実安西三郎寄食の事〕<sup>(7)</sup>

山下を討つたのが安西の軍勢のみであったように語るところには脱落を認めうる。「おのく軍勢をもよふし」とあり、「安西と丸・金鞠のもの共不和と成り」とあるのを勘案すれば、『里見九代記』などが伝えるように、金鞠(神余)の遺臣および丸勢との連合軍が山下を倒した後に領土分割に当たって両者の対立が生じたと見るべきだろう。ともあれ、ここには安西三郎の元に「寄食」する義実の姿がある。「房州平

均」を里見氏五世左馬助の事跡とするのだから、義実が安西の「侍大将」としてのみ行動していることになる。

『八犬伝』が扱ったのは『里見九代記』の次のような記事であろう。

その時分、神余が家臣山下左衛門謀反を起して、君を密に殺害し、おのれ神余郡の主となり、これより此の郡を山下郡と号す。さる間、丸・安西、彼が無道を憎んで左衛門を討つ。即ち此の郡を分取るについて俄かなる合戦出来し、安西勝ちけり。然る間、丸神余が家来の牢人、義実公を大将とす。別ち大将氏元は神余が兵を催して、千台に打出で給ふ時、御勢五十騎になり給ふ。その陣場の橋を五十騎橋と其の時より名付けたり。貞行と三浦の衆は、丸が勢を催し、千台村に來り、則ち安西が城へ押寄せんと馬を早む。安西も滝田河原まで打出で、陣を取りて居たりしが、如何思ひけん、降人に出でたりしより、主従の御契約あつて、安西を先手になされ、東條へ押寄せ給ふ。<sup>(8)</sup>

安西を討ち、安房を統一するのが義実であることはもちろん、「五十騎橋」の起源を語るところも『八犬伝』に近いのである。

『八犬伝』はそうした骨組を受け継ぎながら、そこに玉梓の怨念を導入し、因果に支配される伝奇的物語世界を切り開いていくわけだが、その際に骨組み自体に変更を設けてもいる。最も目につきやすいのは、義実の安房渡航を早め、安房の争乱の早期から里見義実を投入した点とである。

山下定包が主君を弑し神余の所領を奪ったことは、玉梓の設定や謀

殺の計略などの具体的展開がまったくの虚構によったことは別として、基本的には軍記に従っている。しかし、山下討伐の主体、あるいは神余領の帰趨などは軍記と異なる。山下は安西・丸(麻呂)の連合軍に滅ぼされ、次いで安西と丸が領地の分配の仕方でも争い、安西が勝つが、後に現れた義実によって平定される。それが『里見九代記』による展開であり、『里見軍記』の語るところも義実の役割を除けば同様であった。安西と丸の争いが語られ、丸を滅ぼした安西が新たに義実の敵対者として現われるという順序は軍記通りだが、『八犬伝』は義実の参加を早めて、山下攻めが義実によってなされたように作り替えたのである。

結城から安房に流れてきた里見義実は館山の城を尋ね、安西景連および麻呂信時に対して、弑逆によって神余の所領を奪った逆臣山下定包を討つべきであり、その先陣を務めたいと申し入れる。自分たちの無力さにも関わらず正義の貫徹を主張して止まぬ里見義実の姿は、「勇もなく。義もなき」安西・麻呂と対比される。しかしながら、諸軍記においては、山下の「無道を悪」んで攻め落すのは、ここで義実によって「神余が為に定包を。討ざるは勇もなく。義もなき武士は憑しからず。」とその不義・臆病・逡巡を指弾されている安西や丸(麻呂)の連合軍なのである。勝ち取った領地の分配で争うなど不徹底なものはあったにせよ、義実の主張する大義はもとも安西・麻呂のものであった。それを義実に移し、安房四郡間の領土争いであつたものを一貫して義実による義のための戦いであつたかのように作り変えるわけで

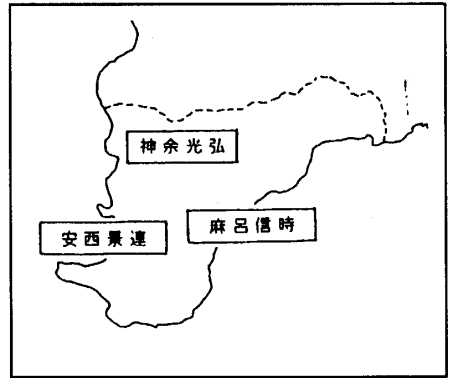
ある。

『八犬伝』は安房四郡の勢力図を、弑逆者定包によって奪い取られた平郡・長狭二郡と、その不義を正すことのできない、そしてあわよくばそれを奪おうとすきをうかがう安房・朝夷二郡という形に組み替えた。そうした無秩序が義実によってすべて統合されるというふうには、義実を中核とする統一過程へと虚構化している。定包討伐の主張を義実に担わせることによって、馬琴は、後に安房を統一(あるいは奪取)することになる資格を付与したのである。

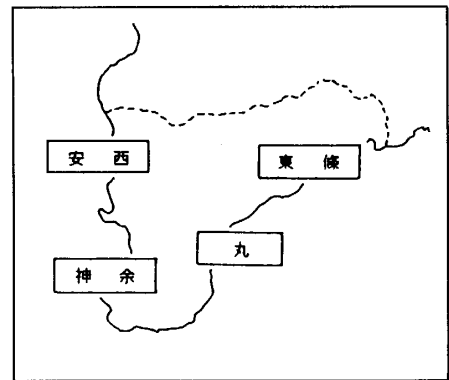
また、前引のように「神余。安西。麻呂の三家は。旧交尤浅からず。手足のごとく相佐けて。当国久しく無異なりし」とあつたのも、軍記が四郡を神余・安西・麻呂・東條の四人が領有していたと記すところから改編したものである。軍記は、石橋山に敗れて安房に敗走した頼朝を助けた功によって麻呂・安西・東條・神余に分ち与えられたことを、『吾妻鏡』に依拠しつつ述べるのだが、馬琴は、東條を神余の「一族」として合体してしまつた。神余と東條との同族関係は軍記では確認しえないから、そうした関係は馬琴の創作であつたと考えられる。

ちなみに、このことは地理的な再編にも関わるだろう。『八犬伝』第二回で馬琴は、安房の勢力分布をこう説明する。

安西三郎大夫景連は。安房郡館山の城にあり。(中略)麻呂小五郎兵衛信時は。朝夷郡平館の城にあり。又長狭郡。東條が氏族たる。神余長狭介光弘は。秋則が後として。平郡の滝田に在城せり。



『八犬伝』における安房の勢力分布



軍記における安房の勢力分布

しかし、「神余」の地名は安房郡にあり、そこを名字の地とする神余氏の領地も当然のこと安房郡にあったと見るべきなのである。そのことはたとえば『燕石雑誌』（文化八年（一八一七）刊）の「引用書籍目録」にもあげられる『和名類聚抄』には、

神余（カウアマ） 安万里（カウアマ） 可無乃（カウアマ）（国郡部、安房国、安房郡の条）<sup>（9）</sup>

と載っていて、馬琴も知り得たと考えてよい。すなわち、馬琴は、本来安房郡にあったはずの神余の領地を平郡へと移しており、安房に神余、朝夷に丸（麻呂）、平郡に安西、長狭に東條という勢力配置を変更している。

かつて安房の国府は平群におかれていたのであり、「東條が所領を合して。安房半国の主」となり、「安西麻呂を下風に立して。推て国主と称し」ていた神余の領地にふさわしいと見做されたのかもしれない。安房半国を得、次いで同じく半国の主となった安西と戦って一国を統

一するといふふうには物語を進めるために、神余・東條、安西・麻呂を隣り合わせる必要があったのかもしれない。いずれにせよ、神余領と東條領を併合させたために、あらかじめ安房統一過程から義実の東條攻めを省くことになったのである。

それは第一に、義実による安房統一過程を単純化し、犬祖神話構想導入の契機となる山下定包討伐、玉梓処刑と、八房への報償の約束を語る安西との対戦の方に焦点を合わせるためだったのだろう。しかし、重要なのはそれによって義実の領土拡大への姿勢が希薄化しうるといふ点である。『里見九代記』では、安西を降伏させたのち義実が東條を攻めたとあるのみで、そこに何等の理由づけもなされていなかった。山下の謀反以来の安房の紛糾に関わる何らの義も存しないのである。領土拡大の欲望に突き動かされた戦いと見るほかない。勢力の拡大のために他を切り従えようとする義実の行動は、軍記作者にとつては当然のこととして認められているのであるが、そうした軍記の姿勢を、義を重視する『八犬伝』は受け継ぐわけにはいかない。義実の義は奸臣定包を倒し人々の苦を除くことにあった。義によつては裏付けられない東條攻めを、馬琴は周到にも排除しているといふことになる。それによつてこそ、山下・安西との対立を構想しえたわけである。義実の安房統一が積極的な攻略の結果でなく、防衛戦の儻倖的な勝利によつたとする義実像理想化・政治論と、それは軌を一にする。

『里見軍記』自体、里見氏を顕彰しようという意図によって書かれているのだが、『八犬伝』は義を強調して里見氏の安房統一過程を作り変えたと言える。そういう操作を通して、安房の賢君・里見義実を定着させたわけである。

#### 四

それにしても、冒頭第八回においてすでに安房の理想的な秩序が確立したとするなら、それ以降の物語はいかにして可能なのか。

先に引いたように、安西景連を倒した里見義実によって安房統一が果たされたとき、「夜戸を鎖す。又遺たるを拾ふものなし」という状態が実現したのだが、同時に、「久後は卒しら浜に……」と将来における混乱が暗示されてもいた事を想起しよう。安房にとっての最初の危機は、秩序がうち立てられたまさにそのとき胚胎したのである。すなわち、義実による安房統一の過程を語るのと並行して、山下討伐戦後の玉梓処刑に際して発せられた「言の咎」によって玉梓の呪詛を発動させ、対安西の防衛戦のさなかに玉梓怨霊の憑依した八房に対して発せられたもう一つの「言の咎」によって伏姫の悲劇を招来したのであった。

里見義実の言動の中の瑕疵が伏姫の悲劇をもたらしたわけであり、その意味で安房の仁政には欠陥が忍びこませられていたと言うこともできよう。仁君義実自身が信義を破ることで、安房の秩序は根底から

震撼されることになるだろう。しかし、それは信義を守るために八房に嫁ぐという伏姫の自己犠牲によって守り抜かれるだろう。すなわち、伏姫の読誦する法華経に耳を傾けるようになった八房に玉梓怨霊は、法華経の功德によって次第にその怨念を消滅させていくのである。そのことは第十三回の挿画「妙経の功德煩惱の雲霧を披く」に示されている。安房は「仁」の国としてまず成立した。そこに玉梓の呪いが八房を介して歪みを生じさせたとしても、それは伏姫の供犠によって浄化されたと考えることができよう。

義実の「言の咎」が発端部の安房に危機を招き入れ、そこから物語を動かしていくのであって、義実の理想性の限界は確認しておかねばなるまい。伏姫の義死は義実の仁を補完するものである。伏姫の靈威によって保護され、義実の仁徳によって支配される安房国が定着するのである。それ故に、安房国内には何事もなく、畠田素藤の侵攻まで約二十年の平安が保たれるだろう。

ところで、右のような作為を可能にしたのは、安房が周辺諸国と関係しない、半ば独立した国であったとする虚構であった。善なる里見義実が弑逆者・圧政者山下定包を倒して平郡・長狭を掌握し、領土拡大を計って里見をだましうちしようとした安西を逆に滅ぼして安房一国の支配権を固めたとする構図を確認した。ここで、義実対定包、義実対安西の関係のみで、換言すれば、安房一国内の闘争によって里見氏の領国支配が成立したという点に注意を払っておきたい。それが軍記の記事に従っていたにせよ、例えば、山下定包討伐を進言する里見

義実に対して、安西は、

畿内坂東大かたならず。兵乱に苦めども。安房は年来無事にし

て…… (第二回)

と言ひ、あるいはまた、麻呂に、

わが安房は小国なれども。東南の尽処にして。三面すべて海なれば。室町殿の武命を受ず。両管領にも従ねど。鄰国の強敵も。

敢境を犯すことなし。 (第三回)

の言があつたように、それは馬琴の意図においても確認・強調されたことがらであつた。永享の乱・結城合戦など、関東全体を覆つた混乱は、安房には及んでいなかったとされるのである。史実においては古河公方足利成氏の近習として関東での軍事行動に参加していたとされる里見氏が、関東諸勢力の対立構図の中に位置づけられておらず、そうした要素は捨象されている。安房は半ば独立した世界として、まさに東南端の独立国のごとく扱われるのである。

安西・麻呂らが滅び里見が勢力をふるうようになる経緯は、外部の状況からは独立した地域の中で、神余・山下・安西・麻呂そして里見等のみの正義／不義、仁／不仁などといった、言わば理想化・単純化された要素によって語られる。すなわち、関東の争乱の中で動き出したはずの『八犬伝』の物語は、しかし、発端部においては、外部のそうした状況と交差することなく、安房一国内で処理され、その結果義実の体現する仁徳も、史伝的背景の中で意味づけられるものではなかつたのである。

鎌倉公方となつた足利持氏の末子成氏は、安西を倒した義実に対して、褒賞を行う。

持氏の末子。成氏朝臣。鎌倉へ立かへりて。はや年来になりしか

ば。このとき滝田へ書を贈りて。一国平均の功業を称賛し。室町

將軍へ聞えあげて。則り里見義実を。安房の国主にまうしなし。

刺治部少輔に。補せらる、よし聞えしかば。義実歡喜雀躍し

て。京鎌倉へ使者を進らせ。土産種々献る。 (第九回)

あるいはまた、成氏を辭我に迫つた鎌倉の両管領は、

悔りかたく思ひけん。再て京都へ執奏して。義実の官職をす、

め。治部大輔になしてけり。 (第十一回)

と遇する。これらが示すように、安房の秩序も永享の乱以後の関八州の政治的な対立の中に位置づけられるものだった。物語の進展にしたがつていずれはそうした問題が浮上してくるはずである。

(1) 播本真一『故事部類抄』について——『南総里見八犬伝』との関

連を中心に——(『日本文学研究』第33号、平6・1)は、「援引事

実」が和刻本『事文類聚』に採られた『後漢書』『五代史』の記事を合

わせたものであることを指摘している。

(2) 拙稿「団円構想の転回——『南総里見八犬伝』ノート——」(『和洋

女子大学紀要』文系編第31集、平成3・3)参照。

(3) 徳田武『弓張月——作品鑑賞』(図説日本の古典19『曲亭馬琴』、

集英社、昭55・10、所載)参照。

『南総里見八犬伝』の史伝的展開(上) 石川 秀巳

(4) 拙稿「琉球争乱の構図(下)——『椿説弓張月』試論——」(『山形女子短期大学紀要』第17集、昭60・3) 参照。

(5) 前田愛「『八犬伝』の世界——「夜」のアレゴリー——」(『幕末・維新期の文学』、法政大学出版社、昭47・10、所収。初出は、『文学』昭44・12) 参照。

(6) 浜田啓介「里見八犬伝と里見軍記」(『近世文芸』第42号、昭60・5) 参照。

(7) 『里見軍記』の引用は、京都大学付属図書館蔵の写本によった。ただし、句読点等を私に付した。

(8) 『里見九代記』の引用は、東北大学附属図書館狩野文庫造本による。ただし、句読点等を私に付した。

(9) 『和名類聚抄』の引用は、東北大学附属図書館狩野文庫造本による。

(10) 千野原靖方『戦国大名里見氏』(平1・6、崙書房) 参照。

〈付記〉 『南総里見八犬伝』本文の引用は、架蔵の後印本によった。

引用に際して、割注の振り仮名は省いた。